

同窓会会報

目次

会長挨拶	1
看護学部長挨拶	2
平成28年度東京女子医科大学看護系 入学生・卒業生数、同窓会会員数	3
教員一覧	4
第16回総会報告	5
講演「アサーティブに 自己表現できる自分になる」	11
講演「同窓会に寄せて」	12
同窓生の動向	13

同窓生からのメッセージ	16
東京女子医科大学病院の エキスパートナースの歩み その2	17
学園祭を終えて	21
研究助成金・学生ボランティア助成金応募	23
研究助成金による研究報告	24
掛川市吉岡彌生記念館のご案内・ 同窓生の書籍紹介	25
会則	26
おしらせ	28

平成28年度 第16回 同窓会会長挨拶

東京女子医科大学看護系同窓会会長 三家本洋子



会員の皆様におかれましては、お元気にご活躍のこととお喜び申し上げます。

日頃より同窓会活動にご理解とご支援を賜り心より感謝申し上げます。

また、6月11日（土）の東京女子医科大学看護系同窓会総会におきましては、多くの

皆様のご参加をいただき盛大に会を終えることができました。心より厚くお礼申し上げます。

私は、定年退職し、私にできることがあればと僭越ながら会長職をお引き受けしました付属看護専門学校卒の8期生です。どうぞ宜しくお願いいたします。

長い看護師生活の中で、いつも東京女子医科大学付属看護専門学校で教育を受けたことを誇りに思ってきました。当時、他に類を見ない厚い教育体制の中で、小林富美栄先生は、学生に対する誠意、何事にも学生の意見に耳を傾け、学生の主体性を尊重し、絶えず自己研鑽を求められました。それは、専門職がとるべき基本姿勢と理解されていたからです（小林富美栄と看護：守屋研二著より）。私はこれまでの看護実践や看護管理において、自己研鑽の意義を実感してきました。それは、学ぶ充実感やさらなる向上心、看護師個々の成長、結果として現れる患者さんの良い変化や仕事の成果です。そして看護が好きだ、仕事が楽しいと思えるようになったことです。何を行う時にも、自己研鑽と責任感・誠実さがあれば良い仕事ができると思います。

同窓会も、その精神は受け継いでいます。看護専門職者として看護の発展と社会に貢献するとともに、東京女子医科大学の看護の発展に寄与することが同窓会の目的にあるからです。

2016年4月に、小児看護学の日沼千尋教授が、看護学部長に就任されました。ますますの母校の発展が期待されます。本院では学部棟建設・耐震工事、八千代医療センターでは新棟オープン、東医療センターでは新築移転の計画などが行われています。

吉岡理事長をはじめ、看護学部長・統括部長・3病院の看護部長にご挨拶させていただく中で、同窓会への期待を強く感じました。また総会におけるアンケートでも、学生への奨学金、ボランティア活動、災害への義援金、ホームページの活用、寄付の受付や、講演や参加者を増やす提案等貴重なご意見を多くいただきました。今後、議論を重ねながら期待に沿えるよう頑張りたいと思います。自己研鑽を忘れず、東京女子医大の理念である「至誠と愛」に基づき同窓会活動に真摯に向き合い、目的・目標や課題を共有しながら有意義な会にしたいと考えております。

現在、会員が7,575名ですが、住所不明の会員の方々が約50%いらっしゃいます。各学年の代表を募って、少しでも多くの会員の所在を明確にすることから始めて、同窓会会員のつながりを広め、同窓会の可能性とその実行のために頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

最後に、会員皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

東京女子医科大学看護系同窓会会員の皆様へ



東京女子医科大学
看護学部長 日沼千尋

東京女子医科大学看護系同窓会15周年、誠におめでとうございます。東京女子医科大学における歴史ある看護教育の歩みに、さらに新しい1ページが開かれましたこと、大変誇りに思います。同窓会の皆様には、日頃より多大なご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。

平成28年4月より、看護学部長を務めさせていただくことになりました。責任の重さを痛感しております。看護学部におきましては、1学年90名、4学年で360名の学生が、1年次は吉岡彌生先生の生誕の地、緑豊かな大東キャンパスで、2年次から女子医大病院のある河田町キャンパスで元気に学んでおります。このうち、3学年次後期から20名が保健師国家試験受験資格を得るためのコースを選択し、約15名程度が養護教諭一種免許を取得するコースを選択いたします。卒業生のほとんどが医療機関に看護師として就職しますが、助産師を目指し大学院に進学する学生もおります。

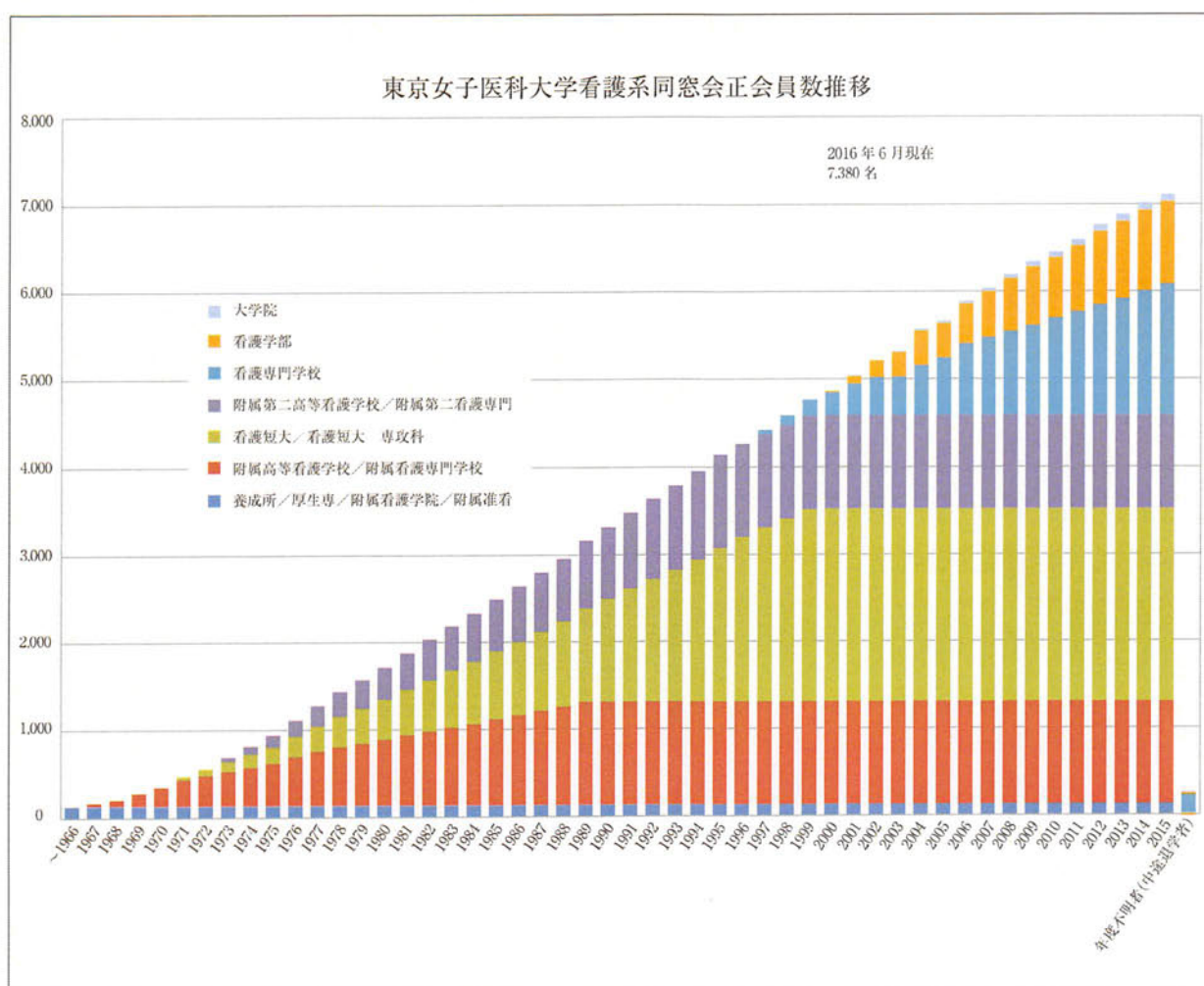
また、超高齢社会、少子社会は、医療、福祉、教育の世界にも多くの期待を寄せ、一方で変革を迫っております。看護への期待も大きく看護教育もまた、社会の変化に対応した変革が求められております。その一方で、看護系大学は260校を超え、本学を取り巻く状況は様々厳しく、私ども看護学部の教職員は気持ちを引き締め、日々本学の発展に努力しているところでございます。看護学部においては、少子高齢社会という社会の変化に対応する教育の変革、具体的には地域包括ケアへと大きく舵をとった医療制度の変化に対応するカリキュラムの改正、アクティブラーニングの推進、さらに多くの優秀な受験生の確保、教育環境の改善などが課題となっております。未来を展望し医学部との協働教育のさらなる推進と障害学生支援の取り組み、大学院との連携による研究者、高度実践看護師の育成など、本学のユニークな取り組みを発展し、役割を果たしていくことが重要と考えております。

念願の校舎新築の計画も見えて参りました。1号館跡地にかつての伝統の面影も残しつつ、医学部との共同の学び舎が建つ予定です。同窓会の皆様には、後輩たちの教育環境の整備にどうぞご理解とご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

私たち看護学部教職員一同、学生たちの成長を喜びとし、本学の向上に精一杯努力してまいりたいと思います。皆様のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成28年度東京女子医科大学看護系入学生数／
平成27年度東京女子医科大学看護系卒業生・修了生数

	平成28年度入学生数	平成27年度卒業生・修了生数
看護学部	90	90
看護専門学校	91	81
大学院博士前期課程	11	19
大学院博士後期課程	7	1



平成28年度 看護学部・看護専門学校教員一覧

【看護学部】

■基礎科学系				看護管理学	教授	池田	真理
生理学	准教授	神山	暢夫	小児看護学	教授	日沼	千尋
生化学	准教授	伊東	栄子		准教授	関森	みゆき
■人文社会科学系					講師	奥野	順子
心理学	准教授	松壽	英士		助教	櫻田	章子
社会学	准教授	諏訪	茂樹		助教	木戸	恵美
英語	講師	設楽	靖子	母性看護学	教授	小川	久貴子
■臨床医学系					准教授	土江田	奈留美
外科学	教授	尾崎	恭子		講師	竹内	道子
内科学	准教授	南家	由紀		講師	拔田	博子
■看護学系					助教	田幡	純子
基礎看護学	教授	守屋	治代	老年看護学	助教	潮田	千寿子
	准教授	菊池	昭江		助教	鈴木	小弥香
	講師	見城	道子		教授	長江	弘子
	講師	加藤	京里		准教授	坂井	志麻
	助教	小宮山	陽子		講師	原沢	のぞみ
	助教	林	由佳		助教	渡邊	賢治
					助教	小池	愛弓
成人看護学	教授	飯岡	由紀子	地域看護学	教授	清水	洋子
	准教授	原	三紀子		准教授	中田	晴美
	准教授	小泉	雅子		講師	犬飼	かおり
	講師	原	美鈴		助教	渡辺	昌子
	助教	三浦	美奈子		助教	吉澤	裕世
	助教	小林	礼実		助教	高	紋子
	助教	鈴木	香緒理	精神看護学	教授	田中	美恵子
	助教	峯川	美弥子		講師	小山	達也
	助教	那須	実千代		助教	異儀田	はづき
	助教	河合	育世		助教	飯塚	あつ子
看護職生涯発達学	教授	佐藤	紀子		助教	服部	克彦
	講師	草柳	かほる				
	助教	多久和	善子				
	助教	山口	紀子				

(平成28年4月1日現在)

【看護専門学校】

主事	廣門	三千子	谷井	千鶴子
教務主任	小川	悦代	沼尻	裕美
教務主任	藪	絵美子	濱谷	敦子
専任教員	相原	亜紀子	平山	まゆみ
	浦川	寿美子	舟橋	陽子
	坂梨	志津子	村上	由香
	佐藤	智子	前田	美那子
	杉山	貴子	柳沼	厚子
	田中	美由紀		

(平成28年4月1日現在)

東京女子医科大学看護系同窓会 第16回総会報告

日時：2016年6月11日(土) 13:00～13:50

会場：東京女子医科大学 看護学部第1校舎123教室

開催に先立ち物故会員への黙祷が行われた。次いで三家本洋子会長の挨拶、特別会員である日沼千尋看護学部長からご祝辞の後、議長に鳥海和枝氏、書記に鈴木はるみ氏が選出された。

なお、出席は理事15名を含む87名であった。第4章13条2)に基づき総会が開始され、以下の議題について、報告ならびに審議がなされた。

議 題

1. 平成27年度事業報告
2. 平成27年度決算報告
3. 平成28年度事業計画案
4. 平成28年度予算案
5. 会則内規の変更



審 議 事 項

(1) 平成27年度 事業報告

<庶務係>

1. 第6期同窓会組織図作成、理事・代議員名簿作成、管理
2. 第6期理事会・代議員会 司会、書記担当表作成
3. 理事会・代議員会のレジュメ作成、案内の作成・配信
理事会・代議員会の会場確保
4. 会員からの問い合わせの対応、住所変更等の手続き、会員証の発行
5. 会員名簿管理 (株式会社サラトへ委託)
・平成28年度会員数登録件数 (5月度)
正会員数 7,160件 (平成27年度より95件増)
特別会員数 9件 賛助会員数 34件
学生会員数 372件 (看護学部：196件 看護専門学校 176件)
合計：7,575件
住所判明件数：3,687件 (48.7%) 住所登録等処理件数：153件/年



6. 特別会員・賛助会員への年賀状発送

<学生支援・将来計画係>

1. 学部生、専門学校生、大学院生への入学時・卒業時の記念品贈呈、同窓会入会案内
入学時：ロゴ入りクリアファイル ライト付きボールペン
卒業時：ミキモトオリジナル キーホルダー
2. 学生会員・正会員入会準備
入金のための学校との調整および学生へのインフォメーション、集金
正会員 (平成27年卒業生) 看護学部：21名 大学院生：5名 看護専門学校：88名
学生会員 (平成27年度入学生) 看護学部：72名 看護専門学校：88名
3. 学部、専門学校の学園祭支援金の寄付
各学園祭に支援金5万円を寄付
4. 学生ボランティア活動への支援
募集要項の提示：ホームページ、会報、掲示
応募：1件 (看護学部音楽部)
5. 同窓会オリジナルグッズ
第11回東京女子医科大学看護学会学術集会、3施設看護研究会発表会、他随時提供した
6. 臨床看護師への研究助成
募集要項の提示：ホームページと会報



<総会係>

1. 2015年度 第15回看護系同窓会総会実施

平成27年6月13日(土) 13:00～13:45 会場:看護学部123教室

出席者:102名(会員:78 賛助会員:1 理事14 代議員:7 監査:2)

平成26年度事業報告・決算、平成27年度事業計画・予算案について、賛成多数により承認

審議事項 会則の変更(賛助会員と特別会員資格)について、賛成多数により承認

2. 総会案内の発送と返送

発送数 3,901通(うち未返信数 3,672通、宛先不明による返送数 54通)

返信数 175通

<会報・ホームページ係>

1. 看護系同窓会報第15号の発行(発行部数4,360件)

新たに「東京女子医科大学病院エキスパートナースの歩み(3回シリーズ 第1回目)」を設けた

2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営

・看護系同窓会報第15号の掲載

・東京女子医科大学看護学会第11回学術集会の案内・ポスターの掲載

・ホームページの更新

【ホーム】「トピックス」の平成28年度同窓会総会の案内、
関連研究会・公開講座の案内の掲載

【会長挨拶】第6期の新任会長挨拶の掲載

【役員名簿】第6期理事の名簿に更新

【各種問い合わせ・申請先】担当理事および連絡先の変更

【掲示板】利用がなく個人情報の問題もあるため廃止

・会員証発行並びに住所・氏名変更を庶務掛に依頼



<会計係>

1. 活動方針

1) 同窓会活動の円滑で安全な財務管理、会計管理、予算執行管理

2) 上記を目的とする現行システムの見直しと新システムの構築

2. 活動報告

1) 予算の執行管理

2) 会費入金状況把握:学生支援(学生説明)、
庶務(株式会社サラトによる名簿管理)と協働で会費の集計・管理

3) 財務・会計管理に関するシステム変更:学債の金庫管理

4) 予算策定の関する指針の提示

5) 各担当の活動計画執行、財務に関する諸事項の円滑な支援

6) 会費の管理

7) 平成27年度収支・決算書の作成、
監事による平成27年度決算の監査

8) 平成28年度予算案の設定



上記について、各副会長から報告があり、賛成多数で承認された。



(4) 平成28年度 事業計画案

<庶務係>

1. 会員名簿管理（株式会社サルト委託継続）
2. 会員証発行（卒業生、会員からの申請時）
3. 理事会・代議員会議事録管理・配信
4. 会員慶弔時の手続き
5. 特別会員、賛助会員へ年賀状発送
6. 各担当の事業内容の保管（電子媒体およびファイリング）
7. 同窓生、その他問い合わせの対応
8. 同窓会室備品・物品管理・整理整頓
9. 第6期理事・代議員組織図作成
10. 第6期理事・代議員名簿作成
11. 第6期理事会・代議員会司会、書記担当表作成
12. 住所判明件数を増やす取り組みの実施
13. 各期生の担当者を決めて連絡を取り、輪を広げる

<学生支援・将来計画係>

1. 学部生、専門学校生、大学院生の入学時および卒業時の記念贈呈と入会案内
2. 学生会員、正会員入会の準備
3. 学部専門学校の学園祭への支援金寄付
4. 学生ボランティア活動への支援
5. 庶務、会計担当との連携
6. 同窓会オリジナルグッズ
ホームページと会報で同窓会グッズの紹介予定
第12回東京女子医科大学看護学会学術集会、看護研究発表会、その他随時販売
7. 臨床看護師への研究助成
募集要項の提示：ホームページと会報
8. 同窓会の発展への支援

<会報・ホームページ係>

1. 看護系同窓会報第16号の作成および発行
2. 看護系同窓会ホームページの更新・運営

<総会係>

1. 第16回看護系同窓会総会の開催
2. 交流会の開催

<会計係>

1. 活動方針
 - 1) 同窓会活動の円滑で安全な財務管理、会計管理、予算執行管理
 - 2) 上記を目的とする現行システムの見直しと新システムの構築
2. 活動計画
 - 1) 予算の執行管理
 - 2) 会費納入状況の管理：学生支援担当と共同で入会/就寝会費の集計・管理
 - 3) 財務・会計管理に関するシステムの変更検討
 - 4) 予算策定に関する指針の提示
 - 5) 各担当の活動計画執行、財務に関する諸事項の円滑な支援
 - 6) 会費管理（三菱UFJ普通預金の口座管理、郵便銀行普通貯金口座管理、郵便振込口座の管理、三菱UFJ銀行貸金庫の保管物と金庫契約関連の管理等）
 - 7) 平成28年度収支・決算書作成、監事による平成28年度の決算の監査
 - 8) 平成29年度予算案の設定



上記計画について、各担当理事より報告され、承認された。また、審議事項の第1号議案：同窓会内規第2条の変更「本会の入会金及び会費は以下の通りとする。入会時に入会金・会費を一括徴収とする。入会金 10,000円 会費（終身）：20,000円（看護専門学校・看護学部・大学院入学時に徴収）」について、賛成多数で承認された。

次回 第17回総会予定日：平成29年6月10日（土）

東京女子医科大学看護系同窓会 会長 三家本洋子

大盛況！同窓会員が集うワン・コイン交流会

～総会後のなごやかなひととき 一瞬にして学生時代の顔に戻る～



アサーティブに自己表現できる自分になる —明日からの看護が楽しく、やりがいを持てるために—

東神奈川県警友会けいゆう病院 看護部
精神看護専門看護師 横山 亜矢



私は、東京女子医科大学大学院博士前期課程精神看護学分野の修了生です。よい仲間に出会い、自分自身と向き合った大学院の2年間の学びを経て、現在はリエゾンナースとして患者や家族のメンタルケアに携わっています。今回の講演では、看護師のメンタルヘルス向上にコミュニケーションは大切であること、その考え方としてアサーション、アサーティブな自己表現について紹介させていただきました。

アサーションとは「自分も相手も尊重する自己表現」のことです。具体的にいうと、自分の意見や考え、気持ち、希望、欲求などを率直に、正直に、その場にあった適切な方法で述べるということです。1950年代にアメリカで行動療法の中から生まれました。アサーションの考え方では、人間はそれぞれ考え方や感じ方が違っているのは当然であり、また相手はこちらの意図とは違う受け取り方をすることもあると考えます。そして、こうした違いは尊重される必要があります。アサーティブなコミュニケーションは、お互いを理解し合い、関係を深めていくことができます。アサーティブに仕事ができるようになるためには、アサーティブなものの方の見方、考え方を身につけていくことが必要であり「自己信頼を高めること」「アサーション権を知ること」「合理的なものの方の見方」「怒りのコントロール」「言語と非言語を一致させること」の5つの考え方についてお伝えしました。

私たち看護師は医療現場の中で、患者、家族、医師、コメディカル、同僚など様々な人とコミュニケーションを交わしながら働いています。「人の役に立ちたい」「患者の権利を重視したい」「共感的なやさしい看護師であらねばならない」などの気持ち強い看護師はアサーティブになりにくく、自分の気持ちを押しさえて相手の気持ちを優先するという行動をとってしまうことがあります。そのような言動が続くと、自尊心が保てなくなり、燃え尽きる、心身に変調を来すといった症状を呈することにもなりかねません。

看護師がアサーティブなコミュニケーションを取ることで、患者との信頼関係を築き、よりニーズに即したケアをすることができます。また、自分とは異なる意見をもっている医療スタッフと率直に意見交換し、お互いの状況や考えを理解し合うことができれば、何らかの歩み寄りや工夫を図ることができます。このような取り組みにより、よりよい医療を提供するチーム医療の文化をつくりあげることができます。また、看護師自身の仕事に対する意識と自身を高め、看護師のメンタルヘルスを向上させることにもつながります。

充実した、やりがいのある看護実践を行うためには、私たち自分自身の心身の健康は非常に大切であり、自分らしく、自分自身を大切に、尊重することが前提となります。アサーションに関心をお持ちになった方は身近なところからふれていただきたいと思います。

さいごに、同窓生の皆様には、このような話をさせていただき貴重な機会をいただき、感謝致します。本同窓会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

同窓会に寄せて

東京女子医専付属産婆看護婦養成所
第6回卒業生 篠根 槿子 (旧姓 内山)

私は、大正11年生まれの93歳10ヵ月です。

北海道瀬棚郡瀬棚町に、8人目の末っ子として生まれ、大正12年関東大震災の煽りを受けて、一家は栃木県を目指して青函連絡船に乗りました。私が記憶に目覚めたとき、母に手を引かれて、五行川の橋のたもとで波の音を聴いていました。

昭和13年、兄が私の進路を案じ、新聞で東京女子医専付属産婆看護婦養成所の募集を見て「この田舎でもお医者さん、看護婦さん、お産婆さんは、みんなに尊敬されて、生活も安定している」と言い、私は兄に連れられ上京して受験し、それから5年の歳月を得て看護婦産婆の資格を取得しました。

卒業に際し、当時の養成所長の吉岡弥生先生より「ご卒業おめでとう！これから皆さん世に出て辛い事、嫌な事があつたら、何時でもここが自分の家だと思って帰っていらっしやい」と、永遠に心にしみる感動のお言葉を賜りました。【わが母吉岡弥生先生】と言い、みんなが慕っておりまして。平成16年7月20日長潮病院を最後に退職し、81歳8ヵ月、いくつかの病院を渡り歩きましたが、みんな仲良く、助け合い、忙しいながらも楽しい日々でした。

平成28年の東京女子医科大学看護系同窓会に参加し、バスを降りて見上げると煉瓦造りの古い病院本館(現1号館)、はるか遠い青春の日々が昨日のように蘇り、懐かしく目頭が熱くなりました。孫につき添われてこの同窓会に参加させていただき、係の皆様から優しい笑顔で迎えられ、とても嬉しゅうございました。会場はほぼ満席、同窓会会長である三家本洋子様第1声で、恒例の黙祷、続いて丁寧なご挨拶、引き続き役員の方々、それぞれてきぱきとしたご報告、盛大で緊張したムードの中にも、和みの漂う総会でした。人に接することの少ない私は、この度、会員の皆様から新しい知識と若いエネルギーをたっぷり吸収させてもらいました。有難うございました。

最後に、同窓会会長はじめ会員の皆様のご健康とご発展を衷心よりお祈り申し上げます。

(下記の詩は、多くの賞を取られた篠根さんの詩集から、ご本人の承諾を得て一部掲載いたしました)



ナース・シユーズ
 艶を失い
 古くなったナース・シユーズ
 足にやさしく
 私の癖の方向へ傾いている
 コールがあれば
 夜中でも
 急いで 一緒に病室へかけつける
 ほんとうに
 よく働いてくれたのね
 ありがとう
 このまま捨てるには忍びない
 きれいに洗って
 心の中で 手を合わせた
 夾竹桃の 紅い花が
 病室の 窓ガラスに揺れていた
 五行の橋
 篠根槿子全詩集より

同窓生の動向

なぜか保健師やっています



看護専門学校1回生 米永 真紀 (旧姓：三浦)

私は、看護専門学校3年過程の1回生です。卒業後は第2病院に就職し、ICU・救命救急を経験しました。臨床に出て感じたのが、自分がいかに何も分かっていなかったかということです。就職してからの3年間、当時はとても長く感じた年月でした。そこで、命に寄り添うこと、この人は今までどう生きてきたのか等考えるようになりました。臨床での学びは限りなくありますが、その頃の私は、何も分からないまま看護師を続けてよいのかと考えるようになり、再び看護を学ぶため、他大学の3年次に編入しました。大学卒業後は、病棟の経験がしたいと思い、公立病院に就職し3年間内科病棟に勤務しました。

現在は、埼玉県内の市の保健師として勤務し、10年目になります。正直、自分が保健師になるとは思ってもいませんでした。保健師は、口は出しても手は出さないという印象が強く、その意味がよく分からなかったからです。公立病院を辞めて実家に帰り、非常勤保健師として働きつつ、訪問看護のアルバイトをして、これからどうするか、自分には何が向いているのか、何がしたいのか考えていました。その時に声をかけてくれた先輩が、「保健師にも色々な人がいて、誰かが向いているとか向いていないかではないと思う」と話してくれました。誰かが勧めてくれることを一度経験してみようと、保健師をすることになりました。

入庁して、初めは高齢者と成人の担当を兼務していましたが、現在は保健センターで母子保健に携わっています。乳幼児健康診査や予防接種、育児相談をはじめとして、発達に気になる子の支援、産後うつや児童虐待等、多岐にわたるケース対応に追われる日々です。今でも、答えのない保健師活動に悩み、自分の役割を問い続けていますが、様々な方と関わり感じたことは、手を出すだけでなく、見守りや共感、傾聴、アドバイス等、色々な方法で介入できることはあるということです。こんな私が保健師を続けていけるのは、これまで行く先々で出会った人が支えてくれたおかげです。これからも、たくさんの方々と関わる中で、常に自分に問い続けてやるべきことを見出せるように、努力していきたいと思っています。

「至誠と愛」の理念を受け継ぐ仲間と共に



東京女子医科大学附属第2看護専門学校9回生 吉川 孝子

東京女子医科大学附属第二看護専門学校の9回生として卒業後、30年以上が経ちました。そのうちの20年以上を東京女子医科大学付属第二病院で過ごし、数々の諸先輩方に看護の考え方や技術を沢山教えていただきました。特に、教育理念である「誠実であること」と「慈しむ心」、『至誠と愛』については、今でも心に刻みながら日々業務にあたっています。

私の現在の職場は、埼玉県にある「春日部市立医療センター」という363床の自治体病院です。ここで、看護部長という役職を頂き、この7月に新築移転という春日部市の一大イベントを終える

事が出来ました。

平成22年に設計段階で春日部市病院再整備計画の準備メンバーとして初めて参加し、当時の看護部長と共に、患者の療養生活や相談機能の充実に向けてハード面やシステム整備、体制や運用について考えました。この、当時の看護部長もまた、東京女子医科大学看護短大の卒業生でした。学び舎が一緒である共通点は大きな力となり、結果的に患者の療養環境にやさしい病院として生まれ変わることができたと考えています。

現在、多死高齢化社会となり、地域社会では地域包括ケアシステムの推進を図っています。皆さんもご存じのとおり、このケアシステムを成功に導くのもまた、看護師の力が大きく影響し、施設や訪問看護ステーション、療養型の病院から急性期の病院まで、多岐に渡り活動している看護師の連携は、現場の大きな力となっています。

埼玉県東部地域でも、埼玉県立大学をはじめ公的機関、地域の病院やボランティアが集まり、検討会を重ねています。春日部市も各医療機関の看護師が集まり、それぞれの病院の特徴を活かした医療の提供が、垣根なくスムーズに出来るように、連携会議を検討しています。

医療や看護の有り様が、時代と共に少しずつ変化しています。地域に根ざした現場の看護師が、その時代の変化に寄り添うように何をすべきかを考え、実践しています。

埼玉県は、人口10万人あたりの看護師数全国ワースト1位といわれています。

地域の中核病院である当院が、地域の皆様に必要とされる病院となるように、そして、埼玉県の看護師が、住み慣れた地域に根を下ろして働けるような病院を目指して、出来ることを最大限活かしながら努力して行こうと考えています。

埼玉県には、その他にも、東京女子医科大学系列の卒業生が沢山働いています。東京女子医科大学を基軸にした看護師の仲間が、それぞれの立ち位置で、その理念を忠実に実行に移しているように思います。

私も、学び舎の理念である『至誠と愛』の精神を心に刻み、1歩1歩前に進んでいきたいと思っています。

遠回りしたけれど…

看護短大28回生 田中 景子 (旧姓：宮崎)



現在、私は沖縄県石垣島のデイサービスで看護師として働いています。千葉県出身の私が石垣島に来たのは22歳のとき。石垣島へは看護師としてではなくダイビングインストラクターとして働く為はるばるやって来ました。その後、結婚、出産を経て、「さあ、子供たちも保育所に入ったことだし仕事を始めよう」と思いハローワークに通いました。しかしその時も看護師として働くつもりは全くありませんでした。なぜなら、看護短大を卒業し看護師免許を取得したものの看護師として働いた経験が全くなかったからです。

ある時、ハローワークで見つけたパートで出会った女性に「新しくデイサービスをオープンするから、そこに看護師として来ないか」と声をかけられました。その女性こそ、現在勤務しているデイサービスのケアマネージャー兼事業所の所長だったのです。看護師経験の無い私は半年間病院へ研修に行き、デイサービスのオープンから看護師として勤め始め6年が経過しました。病院勤務の経験が少ないことをマイナスに考えず、今ではデイサービスならではの看護をするということを心がけています。

人は誰しも年老いたときに、最期まで住み慣れた地域、住み慣れた自宅で過ごしたいと思うもの。そんな時、看護学生時代の地域看護の実習が思い出されます。「デイサービスでの看護師の仕事はここまで」と卒を決めず、お年寄り一人一人にかかわるケアマネージャー、訪問看護師、ヘルパー、かかりつけ医、そして家族と連携しながら、お年寄りの在宅生活を少しでも快適に送れるようサポートしています。

沖縄のオジイ、オババは何よりも明るくて前向き、逆に私のほうがオジイ、オババから元気をもらうこともあります。デイサービスの看護師という仕事に物足りなさを感じたこともありましたが、デイサービスだからこそ出来ることがたくさんあります。

今は、日々楽しく、やりがいを感じて仕事をしています。

子どもたちと日々奮闘しながら小児看護を楽しんでいます

看護学部7回生 中川 愛奈美



大学卒業後に国立成育医療研究センターに就職し、現在看護師5年目になります。私が配属されたのは一般小児病棟で、循環器内科・外科、移植外科、腎臓内科、内分泌科、血液腫瘍科と多岐にわたっており、1年目や2年目の頃は日々の業務に加えて勉強量がすさまじく、非常に苦勞しました。特に循環器科や移植外科においては急性期であり急変も起こりやすく、常に予断を許さない状況が続きます。自分のプライマリ患者が亡くなってしまったこともあり、悲しみに暮れ、自分の無力さを非常に大きく感じ、小児看護の終末期や家族看護について深く考えさせられた時期もありました。

最初は自分が思い描いていた看護師の仕事とギャップがあり、業務や勉強に追われる日々であり、こんなにもゆっくり子どもや家族と触れ合えないのかと戸惑いました。しかし業務に慣れ様々なことを経験した今では、看護師としてのやりがいを非常に強く感じられるようになりました。日々の看護業務の中で子どもにどのようなケアや介入をすればよりよく過ごせるか、またより良い症状緩和につながるかを考え、看護計画を練り実際にケアを行います。それらの甲斐あり子どもに良い効果をもたらした退院できたときにはこの上ないやりがいと看護の楽しさを感じます。二年目の時に受け持った白血病の子どもに対して、子どもが自分なりに病気のことを理解しより主体的に治療へ臨めるよう絵本を作成し、プレパレーションを実施しました。その子どもは治療に対し積極的になり、いやな処置も受け入れてくれるようになりました。また退院後、外来受診の際に病棟に顔を見せにきてくれた子どもたちの元気に成長した姿を見ると、あの頃は辛い治療をしていたけどこのように笑顔で過ごせる日がきてよかった、としみじみ感じることもあります。

現在は新人指導を任されるようになり、1、2年目とは違った苦勞があり大きな責任感があります。病棟内の患者の重症度も上がっており、毎日子どもたちと奮闘しています。今後も日々の看護業務に加え新人指導や教育プログラムへの参加など様々な課題がありますが、小児看護を楽しみながら今後もさらに邁進してまいりたいと思います。

女子医大の皆さまに感謝

看護学部4回生・看護学研究科（2011年度入学） 宮長 麻里子（旧姓：西尾）



私は2005年に看護学部を卒業し、その後の8年間、本院の小児科で勤務しました。その間、看護学研究科に進学し、小児看護と看護を見つめ直し、現在は小児専門病院の病棟を経て、今年度から外来で勤務しています。

現在の職場に転職して間もなく、長期入院中の患者さまのご家族にこんなことを言われました。「女子医大病院から転職していらっしゃったの？私は女子医大に入院したことがあるの。あそこの看護師さんにはとてもいい印象があります。あなたの看護をみると、とても丁寧で育てられた、良い看護ができる看護師さんだということが良く分かるわ。女子医大ってすごいね。」女子医大でしか看護を知らない私にとって、この言葉はかなりの衝撃でした。それと同時に、女子医大出身の私の看護が、女子医大の看護の評価を担っていると思うと、心が引き締まる思いになったのを覚えています。

今思い返すと、確かに女子医大では看護学部・看護学研究科・病院、どこでも温かく、丁寧に私と関わって下さった方々しかいませんでした。そして、女子医大を離れた今もなお、私は共に学んだ友人はもちろん、恩師、先輩、病院で毎日闘いのような時間を過ごした女子医大スタッフの皆さまに常に支えられています。

小児看護の現場で働いていると、常に難しすぎる問題に直面します。心が折れそうになったり、なにが正しいのかすら分からなくなったり、時には忙しさを理由に思考を停止させざるおえないこともありました。そんな経験を積みながらも、現在も私は看護師をしています。そしてこれからも、なんだかんだ言いながら、看護師をしていくと思います。

今回、同窓会会報誌に思いを寄せる機会をいただき、改めて、今まで私を育ててくださった方々に感謝し、私も誰かを支えられるような人になること、看護師として子どもと家族のために働き続けようと、自分の思いを再確認することができました。ありがとうございました。

産業保健・看護へのさらなる貢献を目指して

看護学研究科博士後期課程修了（2004年度入学） 野崎 律子（旧姓：吉田）



本学とのつながりは約15年前、修士課程への進学から始まりました。地元（北九州市）で生まれ育ち、産業保健師として働いていた私にとっては、一念発起して上京を決意しました。大学院では、修士・博士ともに1期生だったこともあって、横の結束が強かったように感じます。キャリアでは大先輩にあたる同期が少なくなく、院生室では看護の幅広い領域の話題が飛び交い、看護のあり方についてディスカッションが繰り返されるが多かったです。相互理解を深めるなかで、

看護を取り巻く動向や変化を知り、自身の専門性を磨いていけたことは大変貴重な機会でした。とは言え、院生時代の5年間は、苦行の連続でした。看護学の学び直し。そして研究論文。1文字も進まない日もありました。これらは自分と向き合う辛い作業でしたが、仲間と心を通い合わせ、苦楽を共有し、ともに成長していけるような体験が、様々な困難を乗り越える力になりました。

博士課程修了後は、本学の地域看護学講座の教員として勤務しました。すっかり女子医大にはまってしまいましたが、実際、それだけの魅力を感じられた学び舎であり、職場だったのは間違いありません。その後、他大学を含め9年の教職を経て、今年から再び産業保健師として働き始めました。ストレスチェック制度の導入や健康経営（社員の誰もが健康でいきいきと活躍できる職場環境づくり）へのアプローチなど、職場や企業全体の健康度を高める取り組みを進めています。大学院での学びがより質の高い実践活動につながっていることを実感しています。導いてくださった諸先生方に、心から感謝申し上げます。

女子医大を離れても、恩師、同僚、同期など、交流は続いています。この4月からは、恩師のご発案で女子医大卒の産業保健師を中心とした研究会を定期的で開催しています。「ネットワークづくり」や「お悩み相談」を行うなど、メンバーサポートにも力を入れています。同窓生間の情報と知識をつなぎ、専門性に一層磨きをかける相互研鑽の場として、当会をもっと活発にしていきたいと考えています。

私にとって女子医大は、産業保健・看護へのさらなる貢献という夢が生まれた場所です。これからも夢に向かって挑戦し続けたいと思います。

同窓生からのメッセージ

東京女子医大看護系同窓会の皆様、お元気ですか

看護短大1回生 海老澤 のり子

私たち看護短大1・2回生は薄井坦子先生をお迎えして、有意義で贅沢な、そして楽しいクラス会を持ちました。鹿児島、新潟、大阪、高崎、宇都宮・全国から32名の仲間が集まりました。

看護短大を卒業し40数年を、臨床・地域・教育・家庭の場でそれぞれが看護と関わり頑張ってきました。仕事・家庭などの人生のターニングポイントを向かえ、薄井坦子先生をお囲みし「これで良かったのかな」「何かできることは」など、仲間達と振り返る時間持ちたいと考えました。

薄井先生はご自身が健康を害された時の体験から看護に求めることを話されました。看護は人々の健康を守ること、健康はその人の生活を整えること。健康に障害を持ち苦しんでいる人と、話す・見る・触れることで問題が理解でき解決することができるはず。先生のお

話に納得し、仲間と共有でき40年前の学生に戻ったようでした。私たちのできる看護をArt and Science and Creativeにかかわって行こうと決意した次第です。

65～80歳の仲間は元気で笑顔がいっぱいです。お邪魔でしょうが、まだまだ、頑張ります。



看護短大28回生同期会を開催して

看護短大28回生 遠藤 亜希子(旧姓:矢吹)

始まりは、私が離職して少し時間に余裕ができたので「今しかできないことをしよう」と思ったことです。私は短大を卒業後、外部の病院へ就職し多くの同期と集まることもありませんでした。今同期会を開催しないと今後もないような気がして、同期の紀谷さんの協力も得て計画しました。

ところが、いざ行動してみると十数人しか連絡がつかず…諦めかけたのですが、以前女子医大での講習会で同期の茂木さんにお会いしたことを思い出し、連絡を試みたら快く協力してくれました。その他にも、SNSで声掛けして下さる方もいて、少しずつ同期のつながりが広がりました。残念ながら全員には連絡がつかせんでしたが、29名同期生と村本先生、金沢先生、鈴木先生をお迎えして「プチ同期会」を開催することができました。

まずは卒後から現在に至るまでの17年間の近況報告会。管理職になった方、認定看護師として専門領域で活躍している方、大学院へ進学した方、子育てを頑張って

いる方などなど、各々の成長や頑張りを聞き、17年ぶりに会う仲間の姿に勇気をもらいました。昔を懐かしみながら本当に楽しそうな一人一人の顔を見て、小規模だけど開催してよかったなと思いました。何より、私が楽しみました。

この時、お腹にいたわが子は7kgになろうとしています。月日が経つのは、本当に早いですね。次回は、プチでなく同期会が開催できたらいいと思います。皆様のご協力に感謝いたします。



毎年、同じ出身校の同期の同窓生の皆様からのメッセージを掲載しております。
掲載にご興味・ご希望のある方は、会報・ホームページ係 (koizumi.masako@twmu.ac.jp) までお問い合わせください。

東京女子医科大学病院のエキスパートナースの歩み その2

—エキスパートナース制度が定着し、国内でスペシャリスト認定が開始された時代(1990年後半)—



はじめに

前号 (Vol.15) より「東京女子医科大学病院のエキスパートナースの歩み」を3回シリーズでお届けしています。第1回では、エキスパートナース(以下、EN) 制度が導入された初期のお話をうかがいました。本号はその続きとなる第2回です。当時の時代背景としては、ENへの認知度も高まり次第に定着し、時を同じくして国内ではスペシャリストの認定(1996年:日本看護協会認定の専門看護師、1997年:認定看護師) が開始された頃でした。このような時代に活躍された3名の先輩方にご参集いただき、その当時は振り返っていただきました。

台風上陸の真っ只中にご協力くださったENの先輩方の紹介

写真左から順番に、3名の先輩方を紹介します。花田正子さん(写真左)は1999年に「ストーマ・褥瘡・失禁ケア」のEN認定を受けました。「これまで女子医大を辞めたいと思ったことが一度もない」という稀有な存在です。本学における皮膚排泄ケア認定看護師の一期生として「当時は結果を残すことに一生懸命だった。当時の仲間と経験は財産」と熱く語っていただきました。現在も本学の本院で勤務され、がん専門看護師の資格も取得し、患者さんに直接ケアを提供する実践者の道を歩むことを選択し、ますます精力的にこの道を歩んでいます。

次の中藤三千代さん(写真中)は、第1期生として1993年に「循環器看護(成人)」のENに認定され、バイオニアとして時代をけん引されてきました。現在は都内の総合病院において循環器、心臓血管外科病棟で師長として活躍されています。中藤さんは「管理者として、実践に強い看護師を育てたい」と話され、ENを経験して培った実践者へのこだわりは、脈々と受け継いでいる様子でした。

最後の紹介となる鳥海奈穂美さん(写真右)は、1999年に「血液透析看護」のENに認定されました。当初から女子力が高く、結婚・育児などのワークライフバランス(WLB)を取りながら、ENに求められる実践者としての役割を存分に発揮されていました。現在は、病院とは全く違う環境の老人ホームで活躍され「戸惑うことばかりだが、女子医大で学んだことやENとして培った経験を生かし、老人ホームでできる看護を模索しながら、日々努力している」と相変わらずの奮闘ぶりを話してくださいまし

た。

なお、インタビューと構成・査読は本同窓会会報係である小泉、原、茂木が担当しました。



新人看護師研修・公開講座の企画・運営を担うEN

ENの教育的役割には、看護部教育委員会主催の新人看護師研修における基礎看護技術演習(バイタルサインの測定、移送・移乗、静脈採血・点滴ラインの接続、輸液ポンプの取り扱い、感染管理、ストレスマネジメント、褥瘡管理、食・栄養の援助、酸素療法・吸引など 注:年度ごとに項目は変化)、EN会主催で日勤後の夕方に開催される公開講座(各専門領域に特化した自由意思で参加する研修)など多岐に渡った。

研修を企画・運営する困難さから学びに発展させる

前者の新人看護師研修では、自分の専門領域でない項目も担当することがあり、とても大変だったイメージがある。病棟では実践していても“実践できること”と“人に教える・指導する”ということはまた別問題であり、初学者に基本からしっかりと教えられるかという懸念を抱きつつ、勉強しながら指導した記憶がある。自分たちの知識・技術を深めて新人教育するという感じだった。

また、準備も前年度の年明けから始まり、研修で使用する必要物品なども各担当者が請求しなければならなかったため、とても大変だったという記憶がある。請求・借用する部署を調査・吟味し、臨床実践上は携わらない手続きも経験した。さらに、研修当日は会場が散在しており、必要物品もすべて自分たちで運搬したため、とても大変だった。南別館の坂道や看護学部までの道のりを台車でガラガラ、点滴棒を押しながら、天気が悪いときもあってハードだった。

当時のENを管轄する副部長からは「研修を企画・

運営するにはこういった準備も必要なのよ。これもENとしての勉強なのだから、自分たちで経験しなさい」と言われた記憶がある。準備も含めた企画・運営は大変だったが“去年の反省は今年生かす、今年の実践は来年生かす”というモチベーションは強く、年々発展させた経緯がある。

看護管理者の温かなまなざしに支えられた研修運営

医療材料は関連部署から貸し出しされることが多かったが、部署の師長たちは新人看護師研修で使うという、快く提供してくれた。当時の看護副部長たちも支持的で、心電図などの演習では「私が胸を貸してあげるわよ」ととても威勢がよかった。「いやいや、副部長の胸なんて借りられませんから」「男子にしましょう。見れないでしょう」と返答した記憶がある(笑)。

研修日には、当時の看護部長よりねぎらいの意を込めて、ピュッフェ形式の昼食が振る舞われた。研修を担当するENが一同に会し、楽しいひと時を過ごした記憶がある。

手順書作成でENの底力を発揮

手順書(現:標準看護手順書)の作成は本当に大変だった。まったく何も存在しないゼロの段階から作ったため、とても果てしない道のりだった。当時の副部長たちからは「エキスパートがいなかったらできてなかった」「EN会は成熟度が高いから、色々なことがすぐ決まる」と言われた。

自分たちは「手順書も教育の一環だから、ENが担当して当前」と感じていた。「EN全員でやらなきゃいけない」という意識は強かった。ENは「組織から何を求められて、何をすべきか」が分かっていたため、目標達成のために一生懸命やった。その分、疲れてしまうことも多かったが、ENは主任や師長のように誰からも認められる存在ではなかったため、余裕はなかった。「自分たちでまともしないと」「お互いに助け合わないと」という団結力は強かった。



ENの活動を支援して下さった当時の副部長

専門看護師・認定看護師の誕生による多様な専門性の探求

本学におけるEN制度は、日本看護協会における専門看護師(以下、CNS)・認定看護師(以下、CN)の認定制度よりも先駆的に発足した。ENという称号は誇りだったし、「頑張らなきゃいけない」と思った。一方、CNSやCNの認定が始まると、認定されていない領域の看護師はとても苦しんだ。なぜなら「専門性」という方向に時代の価値観がシフトしたため、ジェネラリストは「看護師になって何年も経つのに、あなたの専門性は何なの?」と言われることもあった。また、ENからも「公(院外的)に認められたものがない分、本当に大変」「何年もENとして活動しても、結構苦しい」という声も聞かれた。

EN制度発足当初は、看護管理者と臨床看護の実践者の2つの選択であったが、この時代はさらにCNやCNSという選択肢が増えたことで、少々の混乱も生じた。また、「CNやCNSにない専門領域の看護師はENを目指す」「管理職を担いながらCNとして活動する」という新たな価値観も生まれた。

一方、当時のENは手順書の作成など様々な役割発揮を求められ、とても大変な時期だった。そのような中で「ENの資格は要らないけど、認定看護師だけやりたい」という声も聞こえ始めた。ENだった自分は「組織人としてなんと図々しいことだ」「要するにENは大変だからなりたくないけど、CNだけ取って自分のやりたいことだけやりたいという認識ではないか」と憤りを感じたこともあった。

ENの看護実践が目に見える形で認知される困難さ・葛藤

領域によっては、すでに院内で活躍している先輩ENの背中がロールモデルだったため、「ENとして自分が果たすべき役割」が明確化されていた。診療報酬に直結するような領域は、医療経済に影響を及ぼすため、比較的周囲からも認知されやすかった。領域により活動の難易度には差があったため、「承認されにくい」という葛藤はあったのではないかと推察する。

CNSやCNが誕生してからは、これらの看護師に対する組織のニーズも高まり、看護管理者より「取得したら」という話はあった。しかしながら、当時はENとしての自身も確立していない状態で子育てしながら(現在は高校生)、さらに認定看護師を目指して休職するという余裕なんて、まったくなかった。今は「あの時認定看護師を取得すればよかったのかな」と頭をよぎることもあるが、当時は認定看

護師のメリットも自分の中では見い出せなかった。

“ENであること”への惜しみない努力・将来への不安

EN認定制度が発足した当時の看護部長は“実践者としてのEN”にこだわり、大事にしていた。“知識を口頭で教える教育”ではなく、“実際にやってみせる、実践を示す教育”、すなわちベナーの言う「達人看護師」を目指せということだったと認識している。「ENはロールモデルにならないといけない」という教えを受けてきた。新たな役割を担うのは本当に大変だったが、それを拡大させないとENの存在価値はないと痛感した。特に先駆的なENたちは、CNSやCNのような選択肢がない中で認定されたため、使命感が強かった。

一方、日々の職務遂行は必死だった。所属部署では一人のメンバーとして患者を受け持ちながら、合間や終了後に看護相談や準備を含む研修運営などENの役割を遂行した。ENの役割遂行に対する困難さや葛藤は大きかった。当時は3交代の看護体制で、管理者からは「ENは、夜勤も同様に務めながら役割を遂行することが当前」といわれた。それに対して、やはりENになって10年ぐらい経つと自分たちも年を取るわけで、“年々体力の限界はくるのに、何歳まで続けられるのだろうか？”“若いスタッフと同じように夜勤ができるのか？”“これから先もずっとENでやってゆくのか？”などの葛藤が生じ、将来が不安になった。

また、ENの役割発揮は、部署の管理者の裁量・采配により大きく影響を受けた。しかも、何回も何回も部署の管理者は代わるため、その度に理解されるように努力しないと活動できない。反面、役割発揮が認められれば、フリーな時間も確保されて看護相談に活用できるなど、管理者の裁量権は大きかった。

実践者としてのENに対する誇り・自分を支えるもの

ENの発足当時から大切にされてきた“ロールモデル”や“実践力”というキーワードは、当時の役割規定書にも明記されていた。これは“ENの根っこ”のようなものだった。“こんな看護師になりたいと思われるような看護師でなければ”“恥ずかしくない看護実践、態度・姿勢とは？”“実践力がともならない人の言うことは聞かないなんてことにならないように”など色々葛藤しながらも考えていた。

ENになった時の先輩に「依頼されたものは絶対に断ってはいけない。一度断ったら、二度と依頼は

来ると断ってはいけない」と言われた。それ以降“仕事は絶対に断らない”と心に誓い、現在も教訓として守っている。また、諸先輩方から相手にケアを提供する時、自分の態度や口の利き方などに対して「依頼が来るような人格者でなければいけない」というお叱りをよく受けた。ロールモデルになるには、人柄が必要不可欠なのだ痛感した。

また、当時から“ENになった自分と、ENにならなかった自分は何が違うの？”“いや、何も変わらない”といつも自問自答していた。結果的に“ENになってもならなくても、同じような役割を担ったのではないか”と思う。ENという新たな役割を与えられたことにより、“チームをどうするか？”“そのために何を勉強しなければならないか”という発想が次々と浮かんだ。やることはたくさんあったが、それがモチベーションになった。結果的に“ENとしてやり切った”いう達成感は全然ないが、今となると“女子医大のENはやはりすごいことを任されていたんだな”と思うことがある。

専門領域である透析に関連しなくても、患者さんと接して結果が出るというのは、看護に対するモチベーションだった。“対象者に喜んでもらえた”“良くなった”というのは、ENか否かに関係なく一番のモチベーションだった。今回はENの話をしているつもりだったけれど、看護全般に通じることなのかもしれない。



勉強会や看護相談に対応するEN（文献より）

先駆的ENから引き継ぐ者の責任

ENは“とても大きな責任を背負わされてる”というイメージが大きかった。それは、先輩ENたちが先駆的に他の施設にはないものを作って、次にCNやCNSが出て、その激動の時をともに過ごしてきたという責任感でもあった。誰も背負わせてないのだが、勝手に自分たちが背負った気持ちになっていた部分があり、それで日々を頑張れたところもある。そういうモチベーションは、一番強かった世代かもしれない。

先輩ENは、何も無いところからの役割を一生懸命確立した。そこにCNやCNSがふっと現れ、また異なる役割を担う。今は、それが現在の世の中になってるため、ENとCNやCNS、主任・師長兼務との違いが不明確なことにより、新たに抱える苦悩や悩みもあるのかもしれない。

現在の自分につながっていること

退職後、ENという実践者から管理者の道に進んだきっかけは、“ENには権限がないこと”であり、とても弱い立場であると痛感したからであった。やりたい看護を実現するには、ある程度の権限を持つことが必要と考えて、管理者の道に進んだ。ENを経験した自分であれば、“どのように使われたいのか”というスタッフの気持ちが分かる。スタッフがやりたいようにやれる土壌を作りたかった。そういう環境を作るのは、やはり管理者の仕事だから、私が畑を耕すという意思があった。EN時代に良くも悪くも感じた葛藤や権限の制限は、管理者に就いたモチベーションにつながっているのかもしれない。

ENは実践者であるため、もちろん自分が卓越した技術でケアを提供することは重要であるが、結局のところ患者さんにケアを提供するには1人ではどうしようもない。それをスタッフに教え、スタッフのスキルが上がってケアの質を維持することが大切である。だから直接的実践なのか、直接的教育が適切であるかどうか、管理者の自分あまり手を出さないようにしている。

また、実践家であり続けている者は、実践が楽しくて“患者さんに医療・看護を提供したい”という思いが今でも強い。だから、当時のままの思いが現在につながってるというよりは“昔も今も変わらない自分がある”という感覚である。一方で、当時辞めていかれた先輩方の中には、次第に年齢を積み重ね、師長や主任と同じぐらいの年代になる人たちが出てきた時に、権限を持たないことによって自分たちの活動が思い通りにいかない、滞るという苦悩を

抱えながら活動しているという印象があった。

さらに、女子医大でENとして長く勤めた経験は、とても貴重な財産である。新人研修や公開講座、先輩ENと一緒に活動は、現在も大きな刺激や自分の原動力になっている。現在の職場では、看護の楽しみや喜びを感じていない看護師もいるが、看護の楽しさや醍醐味、実践の大切さなどは自信を持って伝えられると思う。実践者から見た管理者への要望やニーズも含めて……

おわりに

台風の最中にインタビューにご協力いただいたENの先輩方、大変貴重なお話をまことにありがとうございました。先駆的な時代から、CNやCNS、管理者との兼務などENのあり方も多様化し、当時の混乱や戸惑いをうかがい知ることが出来ました。

また、ENとしての裁量権や自律性への苦悩を抱える状況から“ENの根っこ”を大切に育み、未来へつなげる揺るぎない意思と勇氣は、現在のENへの大きなエールになると確信しています。次号は最終回となりますが、その後の時代にバトンタッチしてまいります。お楽しみに！

【参考文献】

- 大友陽子：手術室エキスパートナースの役割と現状、看護研究、27、84-88、1994.
- 大橋信子：透析看護におけるエキスパートナースを目指して エキスパートナースの位置づけ エキスパートナースを育てるために、臨床透析、16、613-619、2000.
- 佐藤あゆみ：手術室エキスパートナース認定制とその活動内容1、OPE nursing、19、44-48、2004（画像転載）.
- 佐藤紀子：エキスパート育成に必要な教育カリキュラム、手術医学、26、27-29、2005.
- 佐藤紀子、若狭虹子、土蔵愛子他：手術室看護の専門性とその獲得過程に関する研究、OPE nursing、19、34-42、2004.
- 白石裕子：心疾患領域のスペシャルナース 私のスペシャルナースング 今エキスパートナースとして、HEART NURSING、6、68-70、1993.
- 鳥海奈穂美：当院におけるエキスパートナースの活動、透析ケア、7、38-41、2001.
- 西田文子：リーダーナースをどう育てるか 指導者を育てるために エキスパートナースとして、OPE nursing、11、23-27、1996.

学園祭を終えて

東京女子医科大学看護学部（河田町キャンパス）副実行委員長 小林 千恵

昨年度の10月30日、31日に第55回目となる学園祭を開催致しました。看護学部では、医学部と合同での学生相談会、アロマオイルを使用しているハンドマッサージ、献血、そして今回初の試みとしまして看護学部校舎での講演会も実施しました。どの企画も来場して下さった方々から好評をいただくことができました。

一人ひとりの学生が手を貸し合いながら開催日まで必死に準備し、当日も協力し合うことで学園祭を成功という形で終えることができました。大切な仲間たちと1つのものを創り上げられたことは素敵な思い出になりましたし、今後生きていく上での糧にもなると思います。このような素敵な行事に看護学部副実行委員長として関わらせていただいたことを誇りに思います。

最後になりましたが、今回学園祭を開催するにあたり、お力添えをしてくださった先生方、各関係者の方々、そして学生の方々にこの場をお借りして深くお礼申し上げます。今年度も昨年度のような素晴らしい学園祭を開催することができるよう、尽力に努めたいと思います。ご支援ありがとうございました。



東京女子医科大学看護学部（大東キャンパス）実行委員長 竹内 七海

平成27年10月18日に、大東キャンパスにて18回目となるキャンパス祭が開催されました。昨年度のキャンパス祭のテーマは、このキャンパス祭が人と人とを結ぶ架け橋のような存在になることを願い「架け川」としました。

当日は曇り一つない晴天に恵まれ、たくさんの地域の方々、保護者の方にいらしていただきました。今年は、屋外に小さなお子様向けの屋台を設置したり、餅つきを地域の方に協力していただいたりと、例年になかったことが多く実施され、テーマに込めた”人と人を結べるような存在になりたい”という願いが叶ったように思いました。

まだ、大東での生活に慣れない頃から始まったキャンパス祭の準備。経験がなく、何をどうしたらよいか分からない私たちに、土方地区の方々や先生方は優しく様々なことを教えてくださいました。こうしてたくさんの方々を支えられてこのキャンパス祭は大成功を収めることができたのだと思います。

最後になりましたが、キャンパス祭を開催するにあたりお忙しい中協力して下さった土方地区の方々、先生方、ご支援をいただきました同窓会の皆様、本当にありがとうございました。



東京女子医科大学看護専門学校 N祭実行委員 海老原千恵・石井優三子

昨年10月31日に開催されました第43回N祭は、諸先生方および関係者の皆さまのご支援とご協力により、無事に成功を収めることができました。学生同士連携を取り、地域の方々との交流の場にもなり、看護学生としての社交性や社会性を身につけることができました。昨年度はハロウィンということもあり、学生・教員が一体となって学校全体がハロウィン仕様で楽しみました。ハロウィン仕様の飾りつけから、毎年地域の方々に好評なバザーをはじめ、学生がおもてなしの心で提供する喫茶、景品をかけて楽しめるゲームなど、全ての企画が大盛況となりました。なかでもリラクゼーションは、学生や先生にとって日々の疲れを癒す空間となり、進路を決定する受験生にとっては先輩とゆっくりお話のできる小さな進路相談室となっていました。

今回のN祭は、学生が先生方や地域の方々だけでなく、こうした受験生達とも交流することができ、テーマであった「築」に沿ったものであったと感じます。

これからも諸先生方および地域の方々、受験生との交流の場のひとつであり続けられるようなN祭を築きあげていきたいです。今回のN祭開催にあたってご支援いただいた同窓会の皆さまに、この場をお借りして改めてこころより感謝申し上げます。



学生ボランティア活動

看護学部『音楽部』

部長 小池留莉子 (現4年)

私たち音楽部は、入院している患者様とご家族、病院のスタッフの方を対象とした病院コンサートに加え、入学式、卒業式やオープンキャンパスなどの様々な大学行事に参加し、活動を行っています。昨年度の部員数は2年生・3年生合わせて22人で、音楽の渡邊由美子先生の合唱指導のもと練習をしています。昨年度は東京都リハビリテーション病院、国立障害者リハビリテーションセンター、七沢リハビリテーション病院、神奈川リハビリテーション病院にて7・8月にはサマーコンサート、3月にはスプリングコンサートを行いました。また、東京女子医科大学看護学会、日本臨床死生学会などの学会でも発表の機会をいただきました。12月には東京女子医科大学病院を中心にクリスマスコンサートを行いました。病院コンサートでは、手拍子をしながら聴いてくださったり、涙を流される姿もみられ、患者様をはじめご家族や病院のスタッフの方にもとても喜んでいただいています。また、患者様と手をつないで一緒に歌うなどの看護学実習ではできない貴重な経験をさせていただいています。音楽を通して入院生活の辛いことや悲しいことを少しでも癒すことができるよう、今後もより一層練習に励み活動を続けていきたいと思っています。



看護学部『小児医療研究会スマイル』

部長 阿部由佳里 (現4年)

私たち小児医療研究会スマイルの部員は2年生と3年生、4年生合わせて46人です。月に2～3回ほど東京女子医科大学病院西B病棟6階の小児科において、入院している子どもたちとぬり絵や折り紙、トランプ、またプレイルームにあるおもちゃなどを使って一緒に遊んでいます。また、病室も訪問してプレイルームに来ることができない子ども達とも遊び、少しでも子ども達が楽しめるよう活動をしています。病棟で開催される七夕や夏祭り、クリスマスなどのイベントには積極的に参加し、子ども達が楽しみ喜んでもらえるような企画を考え、病棟のスタッフの方々と連携して調整、運営をしていきました。

昨年度の夏祭りではヨーヨー釣りやボーリング、スタンプラリーを行い、クリスマス会では集まった子ども達と一緒に1つのクリスマスツリーを飾り付け、写真を撮って子どもたちにプレゼントしました。また、全国心臓病の子どもを守る会やつぼみの会(糖尿病の子ども)での保育ボランティアや、サマーキャンプのボランティアにも参加しました。今後も部員一同、病院に入院する子ども達が楽しみ喜んでもらえるように活動をしていき、また病棟で開催されるイベントに参加し企画・運営を積極的に行っていきます。



東京女子医科大学看護系同窓会 研究助成金 応募要領・選考方法・申請方法について

1. 研究助成の趣旨

本助成金は、東京女子医科大学看護系同窓会員が、臨床の場で行う研究を助成し、臨床で働く看護師の研究への意欲を向上させることを目的とする。

2. 募集条件

- 1) 研究の主たるメンバーが、東京女子医科大学看護系同窓会員であること
- 2) 臨床で勤務している者（施設は問わない）
- 3) 研究の成果は、助成を受けた次年度の東京女子医科大学看護学会学術集会での発表または、東京女子医科大学看護学会誌に投稿すること
- 4) 看護研究成果は助成後2年以内に総会で報告を行い、要約して（1,200字程度）会報で報告すること
- 5) 大学院生、研究職は除く（ただし、臨床看護職者との共同研究においては可）

3. 助成金額：

1件につき、5万円を限度とし、6件まで。

4. 申請書の内容：

研究課題、研究目的、研究方法、倫理的配慮、研究計画（進行予定表）

助成金の用途（できるだけ詳細に記入のこと。会議費、学会参加費、交通費は除く）

5. 選考方法

同窓会理事会において慎重に考慮の上決定し、連絡する。

応募した申請書書類は返却しない。

6. 応募締め切り

第8回 平成29年6月末日

7. 申請方法

必要事項を記載の上メールで申し込むこと。

申請書・報告書様式は下記のPDFまたはWORDをご利用下さい。

東京女子医科大学看護系同窓会 学生ボランティア活動助成金 応募要領・助成金選考方法・申請について

1. 学生ボランティア活動支援の趣旨

東京女子医科大学看護系同窓会では、学生のボランティア活動を応援するために補助金を交付する。

2. 応募資格

- 1) 東京女子医科大学看護学部（河田町・大東キャンパス）、看護専門学校の学生で行っている部活動、サークルであること
- 2) 医療施設・老健施設でのボランティア活動であること

3. 条件

1年間の活動を会報で報告すること（5月末迄に学生支援係担当へ報告書を提出）

4. 助成金額

1件につき、5万円を限度とする。

5. 選考方法

同窓会理事会において慎重に考慮の上決定し、連絡する。

応募した申請書書類は返却しない。

6. 応募締め切り

第8回 平成29年6月末日

7. 申請方法

必要事項を記載の上メールで申し込むこと。

申請書・報告書様式は下記のPDFまたはWORDをご利用下さい。

研究助成金による研究報告

申請者：福田浩美、田代裕紀

研究課題 (タイトル)
患者からの暴力に対する看護師と他職種の認識と対応 —包括的暴力防止プログラム (CVPPP) 導入による変化—
研究方法
本研究の目的は、神経精神科の看護師と他職種における暴力に関する認識の実態、包括的暴力防止プログラム (Comprehensive Violence Prevention and Protection Programme: CVPPP) の講習による暴力への不安・自信への変化、CVPPPの活用度を明らかにすることである。対象者は、神経精神科病棟、神経精神科外来所属の医療スタッフであり、調査期間は、平成27年5月25日～平成27年9月16日に神経精神科病棟において実施した。データ収集方法は、独自に作成したアンケート調査用紙を受講前、受講直後、受講3ヵ月後に各々配付し、回答を得た。また、データ分析は、属性および受講前の暴力に関する実態について単純集計を行い、CVPPP活用率の変化、および自信と不安の変化について各々対応のあるt検定Friedman検定により分析した。自由記載については質的に分析し、カテゴリー化を行った。
結 果
研究参加者は64名 (性別：男性：20名 (31.2%)、女性：44名 (68.8%)) で、これまでに暴力を受けたスタッフは70.0%であり、うち58.6%は入職3年目までに受けていた。CVPPPの受講前後において自信の変化はみられず (n.s)、不安は受講前から3ヶ月後の間で軽減した (p<.05)。自由記載では、自信では【知識獲得】など4つ、不安では【経験不足】など5つのカテゴリーが抽出された。また、CVPPPの技術の活用率は受講直後と比較し、受講3ヶ月後には低下していた (p<.001)。
考 察
3ヶ月後に技術の活用率が下がることは先行研究でも明らかとなっており、継続した教育の必要性が示唆された。3ヶ月後に不安が軽減している解釈は困難であるが、自信のカテゴリーに【知識獲得】という意見もあり、CVPPPの活用は有益であると推測される。

申請者：高橋真利子

研究課題 (タイトル)
衝動制御困難な患者へのアンガーマネジメントを用いた関わりの過程の考察
研究方法
近年、衝動的に怒りの表出や自傷に至る患者に対し、患者自らが怒りの感情に適切に対処することを目的としたアンガーマネジメントが有効とされている。今回、衝動的に自傷を繰り返す患者に対してアンガーマネジメントを用いて関わり、患者の行動変容を可能にした看護の有効性について考察したため、報告する。 1) 研究対象：入院中にアンガーマネジメントを用いて関わった双極性障害の患者1名を研究参加者とした 2) 調査場所・期間：A大学病院、B病棟、平成27年1月～5月 3) データ収集・分析：看護・医師記録より患者の言動と看護師の関わりの過程を収集し、怒りの感情、行動の背景にある認知に焦点を当て考察する 情報は匿名化し個人が特定されないよう配慮した。当院倫理委員会の承認を得た。
結 果
研究参加者は以下のような過程をたどったことが明らかになった。 【衝動的な行動が多い時期】では、看護は、①傾聴・受容しつつも効果が得られないことへ、迷いながらの他職種間での患者の傾向や関わり方の検討、②患者との信頼関係を深めながらの具体的な対処行動についての検討の後、【患者自身が対処行動を考え始めた時期】につながった。そして、③客観的な気分モニタリングを通じた患者の自己の気づきを促し、④調子の維持や健康管理を目指した【退院調整が可能になった時期】へつながった。
考 察
衝動制御困難な患者への看護として、患者の言動の意味を理解する姿勢を持ち、患者自身の気づきや意思を尊重しながら、対処行動を獲得していく過程を支援することが有効であると考えられた。

2編の研究は、平成28年10月1日東京女子医科大学看護学会第12回学術集会において発表された。

掛川市吉岡彌生記念館のご案内 —彌生先生ゆかりの地を訪れてみませんか？—

吉岡彌生の偉業を顕彰するため、また市民や来館者の健康維持増進のために設立されました。彌生の生涯を紹介するとともに、健康講座も開催されております。

常設展 ～2017年9/3まで

「吉岡彌生が生きた風景～そこから見える日常」

特別展 12/2～2017年2/12

「遺伝と遺伝子～遺伝子から見た生命の進化とヒトの病気」

イベント

- ・12/17 公開講座「遺伝子から見た生命の進化とヒトの病気」
- ・2017年1/28 健康づくり応援セミナー「腎不全の予防と健康管理」
- ・2017年2/25 健康セミナー「感染症にかからないために」



〒437-1434 静岡県掛川市下土方474 TEL 0537-74-5566

入館料／高校生以上200円、中学生以下無料

※特別展開催時は別料金

開館時間／9：00～17：00（入館は16：30まで）

休館日／毎週月曜と第4火曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）、
年末年始

HP／<http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp>



同窓生の書籍紹介

武田悦子著 『がん看護へのことづて』

山元由美子（元看護学部教授）



本書は、患者として看護者として生活者の視点からがん患者として心構えや看護の在り方への知恵が多く含まれている。彼女が貫いているのは学生時代に刷り込まれた生活者の視点で、生活援助技術や多職種との連携が今なされているのかを問いかけている。彼女は、患者になった当初は辛さに耐えることが精一杯で誰に相談すればよいか、自ら考えて行動することも身近に専門家がいてもできない。SOSを発信したのは自分に少し余裕が出てきたときである。また、病人だからと言って生活の幅を狭めることではなく、専門家がその場に応じた生活の幅を広げるヒントを上げることで患者のQOLは広がっていく。患者がお世話になったと思えるのは根拠に基づく神業の技術や心を込めた援助であると述べている。

専門家の出前の援助と家族や友人を含め多くの人達の支えが、自律した生活者としてその日その日を自分で考えて有意義な人生を送ることができるのではないのでしょうか。

*本書の紹介については、ご遺族の承諾を得ています。

東京女子医科大学看護系同窓会会則

第1章 総則

(名称)

第1条 本会は、東京女子医科大学看護系同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は、会員相互の啓発と親睦を図り、看護専門職者として看護の発展と社会に貢献すると共に、東京女子医科大学の看護の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1) 会員相互の啓発及び親睦
- 2) 会報の発行
- 3) 学校法人東京女子医科大学看護系への支援
- 4) 前各号に準ずる活動

(事務局)

第4条 本会は、事務局を東京新宿区河田町8番1東京女子医科大学看護学部内に置く。

第2章 会則

(会員)

第5条 本会は、次の会員を持って組織する。

- 1) 正会員 次の東京女子医科大学看護系の卒業生
付属産婆看護婦養成所、東京女子厚生専門学校、
付属看護学院、付属准看護学院、付属看護専門学校(旧付属高等看護学校)、看護短期大学・専攻科、
付属第二看護専門学校(旧付属第二高等看護学校)、看護専門学校、看護学部、大学院の卒業生
 - 2) 学生会員 看護学部、看護専門学校、大学院に在学中の者
 - 3) 賛助会員 東京女子医科大学の現職員、認定看護師教育センター生で同窓会趣旨に賛同し理事会が承認した者
 - 4) 特別会員 大学の理事、学長、看護学部長、看護専門学校長、至誠会会長、施設長等で同窓会の趣旨に賛同し理事会が入会を承認した者
2. 会員は改姓、住所変更が生じた際には、速やかに本会に届け出なければならない。
3. 会員が本会の名誉を毀損し、または本会の目的、主旨に反する行為をとった場合には、総会の議を経てこれを除名することがある。

第3章 役員および顧問

(役員)

第6条 本会には、次の役員を置く。

- | | |
|--------|-----|
| 1) 会長 | 1名 |
| 2) 副会長 | 若干名 |
| 3) 監事 | 2名 |
| 4) 理事 | 若干名 |
| 5) 代議員 | 若干名 |
| 6) 相談役 | 若干名 |

(役員を選出)

第7条 会長、副会長、監事、理事および代議員は、総会において承認を得る。

(役員の仕事)

第8条 役員の仕事は、次に示す通りである。

- 1) 会長は、会務を総括し、本会を代表する。
- 2) 副会長は、会長の職務を補佐し、会長に事故のある時は、会長の職務を代行する。
- 3) 理事は、理事会を組織し、その決議により本会の活動を運営する。
- 4) 理事は、本会の会務や会計を監視・監査する。会務や会計に不祥事が生じた場合は、これを総会にて報告する。
- 5) 監事は、理事・代議員などと兼ねてはならない。

(役員任期)

第9条 役員任期は、次の通りとする。

- 1) 一期3ヶ年とし、再任を妨げないようにする。ただし継続して再任は2期までとするが、代議員はこの限りではない。
- 2) 役員は、任期終了後も後任者が決定するまで、その仕事を行う。
- 3) 欠員の補充によって就任する役員任期は、前任者の残任期間とする。

(役員解任)

第10条 会長は、次の場合において役員を解任することができる。

- 1) 会員の2/3以上の解任請求が生じる場合
- 2) 任務に耐えられない状況やその他やむを得ない事情が生じ、理事会がそれを認めた場合。
- 3) 代議員が代議員会に2年間出席していない場合

(顧問)

第11条 本会に顧問を若干名おくことができる。

2. 顧問は、理事会の承認を受け、会長がこれを依頼する。
3. 顧問任期は3ヶ年とする。

第4章 会議および総会

- 第12条 総会は、事業の執行状態、役員の選出・承認、その他本会運営における決議事項を議決する。
- 第13条 総会は、通常総会および臨時総会とする。
2. 総会は年1回開催するものとし、理事会の議を経て会長が招集する。
 3. 臨時総会は、理事会が必要と認めたととき、監事から会務や改訂に不正を発見したとき、会員の1/5以上から総会の開催を求めた場合、会長は速やかに招集しなければならない。
 4. 総会は状況に応じて紙面総会として置き換えることができる。
- 第14条 総会の運営は、次の通りである。
- 1) 議長は総会にて選出する。
 - 2) 総会は、正会員および学生会員の出席人員より成立する。
 - 3) 議事は出席者の過半数により決定する。可否同数の時は、議長の決するところによるものとする。
- 第15条 会議は、理事会と代議員会とし、会長がこれを招集する。
- 第16条 代議員会は、総会に提出する議案、役員の選出、その他必要な事項を行う。
- 第17条 代議員会は、必要に応じて開催する。重要事項決議は、役員の2/3以上の出席者（委任状を含む）により決議する。

第5章 会費および会計

(会費)

第18条 会員は、会費を納入することとする。会費および納入法は別に定める。

(会計)

第19条 本会の運営は、入会金、会費、寄付金およびその他の収入をもって充てる。

第20条 本会の会計は、年度末に所定の会計監査を行い、総会にて報告する。

第21条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 附則

本規約は2001年10月20日より施行する。

この規約の施行に伴い既存の各同窓会規約は、2001年10月20日をもって廃止する。

2002年4月27日改定 2005年6月11日改定 2011年9月16日改定 2012年6月9日改定 2015年6月13日改定

東京女子医科大学看護系同窓会内規

- 第1条 東京女子医科大学看護系同窓会（以下（本会）という）の会計は、本会会則第5章に基づきこの内規により取り扱う。
- 第2条 本会の入会金および会費は次の通りとする。入会時に入会金・会費を一括徴収とする。
入会金 10,000円、会費（終身）20,000円（看護専門学校・看護学部・大学院入学時に徴収）
- 第3条 理事（会計担当）は、毎年その年度の予算を作成し、理事会の議を経て総会の承認を得なければならない。
2. 毎年4月1日以降総会において予算の承認を受けるまでの間は、前年度の予算の範囲内で仮執行することができる。
 3. 会計処理は、予算に基づき理事（会計担当）が会長の承認を得て執行する。
- 第4条 理事（会計担当）は、毎年度の決算を行い、監事の監査を受け、理事会の議を経て総会の承認を得なければならない。
- 第5条 役員が会議・行事などに出席した場合、交通費を含む会務手当を支給する。
- 第6条 正会員、学生会員、賛助会員、特別会員の死亡に際しては、理事（庶務担当）が会長に報告し、弔電を打電する。また故人に供花等に東京女子医大看護系同窓会の名称を使いたい希望があれば、本会事務局に報告のうえ名称のみ使用を許可する。
- 第7条 認定看護師教育センター生は、終身会費として入会時に20,000円を納入する。特典として同窓会への参加、研究助成金の授与、会報や図書館貸出証の発行がある。ただし、総会の議決権はなく理事・評議員には就けない。

付 則

この内規は、2001年10月20日から施行する。2002年4月27日改定 2005年6月11日改定 2011年9月16日改定

第6期 東京女子医科大学看護系同窓会役員

顧問	理事長	吉岡俊正先生	会長	三家本洋子		
	学長	吉岡俊正先生	副会長	野口真由美	篠聡子	
特別会員	至誠会会長	岩本絹子先生		竹内道子	田原昌子	
	看護学部長	日沼千尋先生		小泉雅子		
	看護専門学校長	高木耕一郎先生	監事	古藤小枝子	飯塚晶子	
理事	土谷朋子	高橋恭子	代議員	秋山紀江	馬木小夜子	
	藤原由紀子	坂内みゆき		大井香奈美	大熊あとよ	
	佐藤裕子	林佐多子		小川久貴子	日暮久美子	
	飯塚あつ子	加藤彩		濱田亜希子	船越とし子	
	舟橋陽子	福田浩美		渡邊世津子		
	則松安紀子	小野久美子				
	原美弥子	茂木奈津				

**** お知らせ ****

第17回 東京女子医科大学看護系同窓会 開催予定

日 時：平成29年（2017年）6月10日（土）13：00～

場 所：東京女子医科大学看護学部内 ※詳細につきましては、後日お知らせいたします。

★本同窓会のホームページをご覧ください。http://www.dosokai.ne.jp/kangokeidousokai/?menu=home
会報が届かないという方が周囲にいらっしゃいましたら、お声かけをお願いします。

第13回 東京女子医科大学看護学会学術集会のご案内

日 時：平成29年（2017年）10月7日（土）9:30～17:00 受付開始 9:00

場 所：東京女子医科大学 弥生記念講堂

大 会 長：守屋治代

大会テーマ：人間援助実践としての看護における関係性の構築

HPアドレス：http://www.nrctwmu.jp/meeting.html

住所変更届のお願い

お知らせや会報などを円滑にお届けできるように、住所変更がある場合はホームページ（http://www.dosokai.ne.jp/kangokeidousokai/?menu=cms1）よりお手続きをお願いいたします。

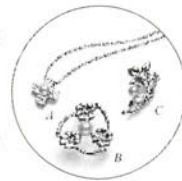
東京女子医科大学看護系同窓会スクールジュエリー&グッズ

東京女子医科大学看護系同窓会スクールジュエリー

ミキモトが東京女子医科大学看護系同窓会のためにおつくりしたスクールジュエリーをご紹介します。英文の校名のイニシャルであるTWMUを美しくあしらったクロスのペンダントをはじめ、創立者の吉岡彌生先生のお好きだったカトレアの花をモチーフにしたピンブローチや、巴をイメージし、葉の一枚一枚をハート形にデザインした四つ葉のクローバーのブローチなどです。学生時代の記念に。また、母校の誇りとして。おつけただく方の美しさを引き立てるとともに、思い出のひとつひとつが胸元で囁きます。この機会に是非お求めいただき、いつまでも大切に愛用ください。

価格改定のため、詳細のお問い合わせ・申し込みは下記のスクールリング係へ
ミキモト本店：〒104-8145 東京都中央区銀座4-5-5
TEL 03-3535-4661

- A ペンダント
パールサイズ 約5.00mm
チェーン 約43cm（アジャスタ付）
K18製、銀製
- B ブローチ
パールサイズ 約5.50mm
K18製、銀製
- C ピンブローチ
パールサイズ 約4.50mm
K18製、銀製



東京女子医科大学看護系同窓会スクールグッズ



バッグ500円/個 A4サイズ
(タテ型2種、ヨコ型1種)

ファイル50円/枚
透明・黄・赤・紫・緑



ライトペン100円/個
黄・ピンク・黄緑・水色・紫

お買い求めは
同窓会役員理事
(P27参照) まで

皆様からのお買い求めを心よりお待ちしております！

編集後記

平成28年は熊本地震、福島県沖地震にともなう津波注意報の発令に5年前の大災害を誰もが想起されたことでしょう。さらに、当たり前なのですが、同窓生の皆様は全員が看護職であり、自然災害にかかわらず日々、生命の第一線あるいはご家族や地域の方々の健康・生命の安全の任を担われていることを強く実感いたします。それは同窓生の近況報告を読めば一目瞭然で、多様な場でキャリアを重ね、生涯にわたって活躍されている同窓生の等身大の姿が容易にイメージされるからです。同窓会誌では今後も活字をとおして、同窓生の皆様に情報とエネルギーをお届けできるように努力して参ります。それでは、女子医大看護系同窓会の発展を祈り、皆様からの近況をお待ちしております。(M・H)

会報担当 小泉雅子 原美弥子 茂木奈津